

# すばらしい生活をありがとう

～生きた英語を教えて学校を巡回～



Emilee McCann

アメリカ合衆国ボストン生まれ、二十二才。八才からメリーランド州ボルティモアに住んでいる。  
昨年五月オハイオ州ケニオン大学を卒業、専攻は政治学。

私は昨年七月に英語の教師として熊本にきました。大学の最後の年に日本に行く決心をし、両親に相談しました。最初は「おまえが一年もいなくなると、とても寂しくなるなあ」と言っていました。でも、私が外国の文化にとっても興味を持っているので、多くのことを学んでくるだろうと賛成してくれました。  
子供が将来の仕事を決める前に、外国の生活を体験させるのは、アメリカの親としては、そう変わったことではないのです。  
熊本では、アパートで日本式の生



活を楽しんでいます。  
日本料理はおいしいし、体のためにもいいと思います。是非、覚えて帰りたいので大きな料理の本を買ってせつせと作っています。  
現在、納豆の作り方を勉強中です。最初食べたのは学校の給食の時でした。気が悪くて変な顔をす

ました。しかし、それぞれの地域に、その土地独特の特徴、例えば、産物、風土、土産品、芸能などがあります。しかも、数キロも行かないうちに全く違ったものがあるといった具合で、その地域の人々の誇りになっていくのです。  
日本はアメリカに比べて、より同質の社会を持っていますが、時として、言われるほど同質的だろうか疑問を持ちました。  
火の国祭りには何週間も前から練習して、先生達のグループで参加しました。沢山の見ず知らずの人と一緒に踊るのは楽しくて、とても興奮しました。  
また、山鹿燈籠踊りは練習なしで見よう見まねでした。夜の闇の中にゆれる燈籠の灯りは、幻想的で、とても印象的でした。  
しかし、その後、祭りでない時にもゆかたやハッピを着ているのを見て、びっくりするのと同時に、感心しました。  
アメリカでは、古くからの衣装はお祭り専用ですが、日本では日常生活の一部にとけ込ませ、伝統文化を上手に残しているように思えます。  
伝統工芸保存の一番の方法は日常生活の一部にすることだとの話を聞き、なるほどと思いました。  
中学校での授業で感じたのは、生

徒たちがとても勤勉で、一所懸命勉強していると言うことです。  
最初は恥ずかしがりですが、生きた英語に接することを喜んで、会話に対する抵抗も、すくなくしてくれました。  
先生方も努力しておられますし、制約はあるかも知れませんが、英語教育にもっと会話をとり入れたら、生徒達ももっと興味を持ち、楽しく勉強できるのではないかと思います。  
地域社会の一員として歓迎し、素晴らしい生活をさせてくれた熊本の皆さん本当にありがとうございました。



英語指導主事助手・英語指導教員  
県教育委員会では、英語教育の充実を図るために、五十八年度はアメリカから二人、イギリスから一人の外国人教師を招致した。県下の中学、高等学校等を訪問するなど生きた英語の指導にあたっている。  
なお、五十九年度は十三名に増員し、より一層の充実を目指している。  
マツカインさんは、六月で任期満了し帰国の予定。

# 21世紀への都市づくり。

## ＜提言1＞ 誇り高い「都市」にする方法

●道路の下に「共同溝」を作ろう！  
街路樹を伸び伸びと育て、目ざわりな電柱や電線をなくし、ガスや水道・下水道の工事のために道路を掘り返さないようにして、日本で最初の本格的共同溝のある都市にしよう。  
●交差点に日本で最初の「共同柱」を作ろう！  
交通信号機、街路表示、案内表示、くずかご、灰皿、時計、スピーカーなどのストリートファニチュアを整理統合して、街角をすっきりさせよう。管理主体の異なる種々雑多なものを共存させるためのシステムがなく



建築家デザイナー 葉祥栄

ては、街の寄せ集めになってしまつて、二十一世紀の「都市」とはとて呼べません。あらゆるものが集中して、処理、供給されることで都市が成立しているのに、バラバラの行政の象徴として、道路には種々雑多なものが寄せ集められています。熊本だけは、二十一世紀にふさわしい都市にしたいものです。  
＜提言2＞  
生き生きした商店街を作る方法  
●アーケードや街の灯りを暗くしたら、店は明るく美しくなる。  
直接目に入らない照明にしたら、ウィンドーが美しくなり、シャッター

を閉める時間を遅くしたくなるでしょう。  
●商店街の共通看板や装飾をやめたら、店が生き生きしてくる。  
統一することは没個性です。各店のウィンドーが季節感をそれぞれ演出して、ハレ(公的空間)とケ(私的空間)のけじめをつけましょう。  
●拡声機をやめたら、街は感覚的になる。  
私たちの神経は、大きな音、雑多な色、強烈な光ですっかりまひしているのです。刺激が続き過ぎていてではないでしょうか。  
●緑を増やしたら、客が増える。  
絵になる街は、舞台の背景のようなものです。背景が自然で、控え目

であれば、人が主役になれるのです。静かであれば、大きな声を出すこともないし、街路が暗ければ、それだけ店のウィンドーは明るく美しく見えるのです。照度がいくら高くても、路面が明るいだけ、目にまぶしいだけなのに……。緑と建物を照らしましょう。看板が今までよりも少なくなり、小さくなれば、もっとデザイナーに凝って美しいサインができるでしょう。きっと街が楽しくなります。どの提言も逆説的ですが、費用面では今までより経済的で、効率的なはず。最も効果的なのは、舗道の床を滑らない楽しい素材にすることでしょう。  
デザイナーは最も経済的なのです。

## 略歴

- 昭和15年 熊本市生まれ
- 昭和37年 慶応義塾大学経済学部卒業、アメリカウイットンバーク大学フライングフライドアートツ奨学生
- 昭和45年 葉デザイナー事務所設立
- 昭和48年 東京国際照明デザイナーコンベン賞、商業空間デザイナー賞受賞、サイン賞受賞



- 昭和54年 日本インテリ アデザイナー協 会賞受賞
- 昭和58年 日本建築家協会 新人賞受賞
- 昭和59年 毎日デザイン賞受賞